

## 内部意匠について

備中櫓は全体が居室として設計されており、その内部意匠は本丸御殿の延長上に考えられています。具体的には絵図と同時代に建てられた類似の建造物から推定せざるを得ませんが、その性格上基本的には櫓というより書院、それも数寄屋風の軽やかな意匠を基調としています。

### 概要

各室の床は畳が敷き詰められ、上段を備える二階についても同様です。また、このうち茶室には炉が切られており、柱や長押等の軸部は全て鉋仕上げ、壁は貼付壁を主体に付属室等の一部を白漆喰塗仕上げとしています。

また、古絵図によれば、『御茶席』の出入口口部分に「クバリ」という記載が見られ、本格的な仕様が想起されます。床や棚などがあったことも絵図によって確認されており、金物類も含め、同時代の住宅系遺構の分析に基づいて細部の意匠を検討しています。

### 天井

天井は各室とも棹縁天井としていますが、二階にある『御上段』だけはより格式の高い格天井（写真11）を使用しています。特にこの格天井と一階『御座之間』の棹縁にはまず下地に柿渋を塗り、その上に漆を3回塗って仕上げる「摺漆塗」と言われる技法を用いています。この二箇所は他の部屋よりも格式が高かったと絵図からも想定できます。

### 建具

内部建具は絵図によれば「唐紙」と記載され、格や三楹、雁皮などを原材料とした和紙が使用されていたことが伺えます。また、縁境の一部には「腰セウシ（障子）」と記載され、さらに一部の部屋境には「唐紙」の開き戸が用いられていたことが明らかとなっています。

特に「唐紙」とは和紙に模様を刷ったもので、襖や壁などに使用される例が多いのが特徴です。

腰障子については津山城から譲り受けたと伝えられる長法寺所蔵の建具（写真12、津山市指定文化財）が参考となります。

### 金具

長押を柱に取付ける際には釘を打ち付けますが、この釘を隠す飾り金具を「釘隠」と言います。津山市内には森家の菩提寺である本源寺本堂が築城とほぼ同時期（慶長12（1607）年）に建立されており、この建物に鶴丸の文様の釘隠が使用されています（写真13）。この「釘隠」のデザインがこの地域に特徴的な形式を備えているということから、備中櫓の金物として採用することにしました。現在この金物を参考に図面を起し（右図）、制作中です。



写真11



写真12

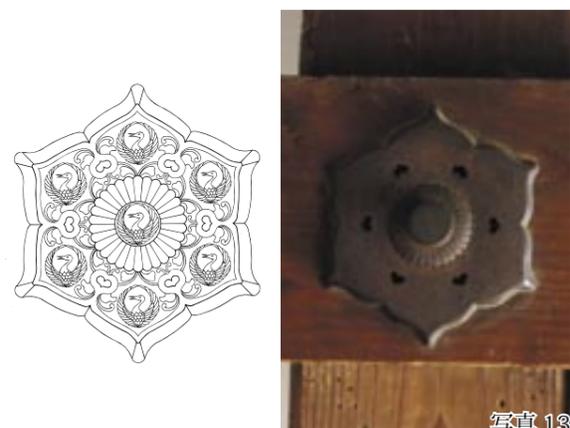


写真13

**津山城だより** No.6  
TSUYAMA JODAYORI 2004年3月

発行年月日	平成16年3月1日
編集・発行	津山市教育委員会 津山城整備推進係 〒708-0824岡山県津山市沼600-1
TEL	(0868)24-8413
印刷	(有) 二葉

※この資料は史跡等総合整備活用推進事業の一環として作成しました。

# 津山城だより

TSUYAMA JODAYORI

No.6  
2004年3月

津山市教育委員会  
津山城整備推進係



## 備中櫓の形が見えてきました。

平成15年9月以来の津山城だよりです。今回で第6号となります。

本年は森忠政が津山城を築城開始してから400年目にあたる記念の年です。津山市では4月から築城400年記念イベントが数多く開催される予定となっており、備中櫓の復元整備工事もそれらの築城400年記念事業のハードウェア事業のメインと位置づけられています。工事は順調に進行し、平成16年度末（17年3月）には予定どおり完成する見込みとなっています。

さて、現在の工事の進捗状況についてお知らせさせていただきます。平成15年9月の第2回現地見学会では、瓦がほぼ葺きあがった状態を見学して頂きました。その後、

壁工事が進み、冬の期間中は気温の関係から壁工事を中断して内部の造作工事を進めています。

まだ荒壁の状態ですが、外観は随分と櫓らしくなってきました。残念ながら仮設足場が周囲を取り囲んでいるために全体の形を見ることは困難ですが、上の写真で現在の様子がわかって頂けるのではないのでしょうか。

今回のたよりでは、外壁や軒裏などの左官工事の工程を説明し、さらに建物の建具や金物など、内装についても若干の解説を加えることにします。

完成まであと一年と迫った備中櫓の復元整備工事ですが、工事はいよいよ最終段階にさしかかろうとしています。

# 備中櫓の壁はこのようにつくられます。

備中櫓の外観は「白漆喰総塗籠」と呼ばれる白い仕上がりとなります。その壁がつくられていく様子を写真で説明します。

## 1. 壁の種類

建物の壁には「大壁」と「真壁」の二種類があります。「大壁」というのは壁の仕上げ面を柱の面より外側とし、柱を被覆してつくる壁であり、「真壁」というのは壁の仕上げ面を柱と柱の間に納め、柱が外側に現れる壁をさします。

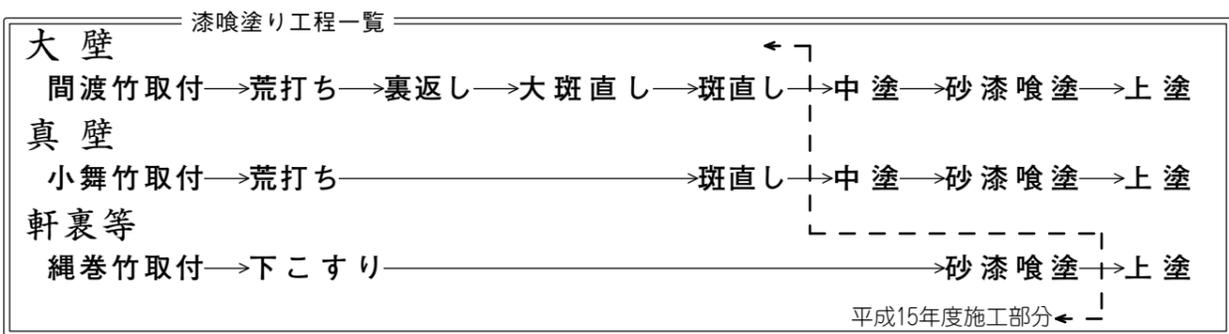
## 2. 備中櫓の漆喰壁

備中櫓では南側及び東西の外側は大壁仕上げで、北側外面の一階部分は真壁仕上げとなっています。また、壁ではありませんが、軒裏などの木の部分にも漆喰を塗籠めます。

## 3. 漆喰壁塗り工程の実際

それでは具体的に見ていきます。漆喰塗りの工程は場所により概ね下表のようなものになります。

壁を塗る前の状態は写真1です。この柱だけの状態か



ら柱と柱の間に竹を取り付けます。柱には竹が乗るように「すし掛け刻み」が施されています（写真2）。次にその上から粘土とわらすさを練り合わせた土を団子状にしてつけていきます（荒打ち、写真3）。しばらく乾燥させた後、さらに同じ土をコテで丁寧に塗ります（大斑直し・斑直し、写真4）。写真5はわら縄の編み方の詳細で「本大和あみ」といわれる方法です。

真壁の場合もほぼ同様に柱と柱の間に小舞竹を取付け（写真6）、粘土とわらすさを混ぜた土を塗ります。その後、大壁と同様に斑直しを行います（写真7）。

写真4では写真1で見られた柱が完全に壁に埋め込ま

れているのに対して、写真7では壁と壁の間に柱が見えているのがわかります。前者が大壁、後者が真壁です。

## 4. 軒裏の処理

軒裏については、木材に直接漆喰塗りをおこなうため、荒打ちや斑直して用いた粘土とわらすさを混合した土は塗りません。その代わりに木材に漆喰がよく付くように割竹に縄を巻いたものを取付けます（写真8）。その後「下こすり（写真9）」として川砂や石灰、麻のすさなどを混ぜたものを付け、さらに砂漆喰塗（写真10）を行います。その後、外壁や内部の壁も同様に上塗を行って完成となります。

